

続 撰河泉考古学談義 2024

第1回	7 18木	藤井寺市出土「修羅」とその役割 —古墳時代の交通と流通を考える—	大阪府文化財センター 調査課 主査 廣瀬 時習
第2回	8 29木	生駒山西麓産土器が語る弥生社会 —近年の土器研究の進展から—	弥生文化博物館 学芸総括 三好 玄
第3回	9 19木	発掘調査にみる百済王氏 —枚方市禁野本町遺跡を中心に—	大阪府文化財センター 調査課 専門員 合田 幸美
第4回	10 17木	花粉分析からさぐる古代の人々と植物の関係	近つ飛鳥博物館 学芸員 東藤 隆浩
第5回	11 21木	北河内に暮らした渡来人 —枚方市伊加賀遺跡の発掘調査成果から—	大阪府文化財センター 調査課 技師 田中 秀弥
第6回	12 19木	大阪に伝来した龍	弥生文化博物館 専門学芸員 河原 秋桜
第7回	1 16木	地中に残る住まいの痕跡	大阪府文化財センター 調査課 副主査 島崎 久恵
第8回	2 20木	智識寺同範軒丸瓦の分布からみる 聖武・孝謙の難波行幸	近つ飛鳥博物館 学芸員 谷崎 仁美
第9回	3 13木	江戸時代における大坂城下町の人々の暮らし —大坂城下町遺跡の発掘調査成果—	大阪府文化財センター 調査課 副主査 若林 幸子

時 間 午前10時30分～12時（受付は午前10時から）

定 員 100名様（要事前申込）

受講料 各回2,530円（税込）

◆ 各回の内容は裏面をご覧ください

お申込み・お問合せは「近鉄文化サロン阿倍野」まで

〒545-0052 大阪市阿倍野区阿倍野筋2-1-40 and 4階

TEL 06-6625-1771

〔受付時間〕

10:00～19:00（日曜は10:00～16:00）

※受付時間は変更になる場合がございます。

受 講

お申込みは

- 事前にご予約のうえ、ご入金手続きをお済ませください。
- 満員になり次第、締め切らせていただきます。
- お支払いには、コンビニ振込みがご利用いただけます。（振込手数料別途）
※詳しくはお申込み時にご確認ください。
- WEBでお申込みの場合、会員登録が必要です。（入会金無料）

WEBでのお申込み、お支払いはこちらから

〔ホームページアドレス〕

<https://bunka-salon.d-kintetsu.co.jp/shop/c/cabeno/>



続 摂河泉考古学談義 2024 講演要旨

第1回

藤井寺市出土「修羅」とその役割 —古墳時代の交通と流通を考える— 大阪府文化財センター 調査課 主査 廣瀬 時習

日本古代、大型前方後円墳の造営に伴う石棺、石室構築材、古代寺院建築における心礎をはじめとする基礎構造の石材や大型木材などさまざまな重量物が運搬されたことが知られています。

この講座では、古市古墳群の大阪府藤井寺市三ツ塚古墳周溝から発見された重要文化財に指定されている「修羅」を紹介するとともに、列島出土の修羅とその構造や使用法を検討します。そのうえで、修羅を用いた当時の道とその構造などを通して、古墳時代の物資の運搬・流通、当時の社会における修羅の果たした役割を考えたいと思います。

第2回

生駒山西麓産土器が語る弥生社会 —近年の土器研究の進展から— 弥生文化博物館 学芸総括 三好 玄

土器の研究の歴史は古く、膨大な成果が積み重ねられてきましたが、近年、自然科学、民族考古学、文字史料との総合研究など、新たな視点に基づく多様なアプローチが試みられています。

このような土器研究の新たな展開を紹介したうえで、生駒山西麓産土器という特徴的な土器群について検討を行います。個性的な粘土と高度な技術を用いて生産され、弥生時代研究において重要な位置を占めてきた、この土器群の生産・流通を新たな視点から捉えなおし、その背景にある弥生社会の特質に迫ります。

第3回

発掘調査にみる百済王氏 —一枚方市禁野本町遺跡を中心に— 大阪府文化財センター 調査課 専門員 合田 幸美

百済王氏とは、朝鮮半島で栄えた百済国の最後の国王、義慈王の子である善光を始祖とする日本の氏族のことです。白村江の戦い（天智2（663）年）後、善光等の一族は難波に居住後、交野が原に拠点を移し、奈良時代から平安時代にかけて活躍します。枚方市には百済王氏の氏寺である百済寺跡と居住地である枚方市禁野本町遺跡があり、調査に携わった禁野本町遺跡を中心に大阪府下にみられる百済王氏に関わる遺跡と遺物についてみてみたいと思います。また、どうして拠点を移すこととなり、移転先に枚方の地が選ばれたのかについても考えます。

第4回

花粉分析からさぐる古代の人々と植物の関係 近つ飛鳥博物館 学芸員 東藤 隆浩

花粉分析はヨーロッパ、とくに北欧において発達し、当地で植生と人間の活動との関係が明らかにされて以降、考古学と結びついてきた歴史があります。日本においては、稲作の開始や伝播の研究のほか、遺跡周辺の植生の時間的な変遷や空間的な広がりへの復元に利用されています。

本講座では、大阪府内各地の遺跡から得られた花粉分析のデータをもとに、古墳時代を中心とした時期の植生を復元し、そこに生活した人々との関係を考えてみたいと思います。

第5回

北河内に暮らした渡来人—一枚方市伊加賀遺跡の発掘調査成果から— 大阪府文化財センター 調査課 技師 田中 秀弥

ひらかたパーク周辺に所在する伊加賀遺跡では、令和5年8月から令和6年2月までおこなった発掘調査で、弥生時代から中世にかけての遺構や遺物が確認されました。特に、古墳時代の中頃の谷からは、朝鮮半島南部の特徴が色濃くみられる土器が大量に出土しました。これらの土器は、渡来人との関係が注目されます。今回は、周辺の遺跡との比較を通じて、伊加賀遺跡の位置づけを行なっていきたいと思っています。

第6回

大阪に伝来した龍 弥生文化博物館 専門学芸員 河原 秋桜

古代中国で生み出された空想上の生き物「龍」。現在でも「龍」は寺社の建物や絵画・工芸品から漫画やキャラクターまで幅広く表現され、愛されています。

「龍」が中国から日本に伝来したのは弥生時代です。大阪府池上曽根遺跡では、「龍」が描かれた弥生時代後期の土器が見つかっています。他にも大阪には、古墳の副葬品や寺の梵鐘、装飾品など様々な「龍」にまつわる考古資料や民俗資料が数多く存在します。大阪府内の資料から大阪の地に息づく「龍」とその源流に迫ります。

第7回

地中に残る住まいの痕跡 大阪府文化財センター 調査課 副主査 島崎 久恵

発掘調査では、過去の人々の様々な生活の痕跡が見つかります。竪穴住居と呼ばれている住居の跡もそのひとつです。住居は『衣食住』ともいわれるように、現代の私たちにとっても、日々の暮らしの中で欠かすことができないものです。では、弥生時代や古墳時代の人々の住居はどのようなものだったのでしょうか。府内の発掘調査事例を中心に、そこに暮らした彼らの「住まい」について考えてみたいと思います。

第8回

智識寺同範軒丸瓦の分布からみる聖武・孝謙の難波行幸 近つ飛鳥博物館 学芸員 谷崎 仁美

大阪府柏原市に所在する智識寺跡は、『続日本紀』天平勝宝元年の記事にあるように、天平12（740）年に聖武天皇が智識寺の大仏を礼拝し、大仏造立を発願したといわれ、聖武天皇やその皇女・孝謙天皇にとって馴染み深い寺でした。当寺からは、特徴的な文様をもつ蓮華文軒丸瓦が出土しており、その同範瓦が後期難波宮や四天王寺といった8世紀の難波行幸ルートに関係する遺跡に分布しています。本講では、同範瓦の分布の歴史的背景に、聖武・孝謙の仏教活動があることとみて考察したいと思います。

第9回

江戸時代における大坂城下町の人々のくらし —大坂城下町遺跡の発掘調査成果— 大阪府文化財センター 調査課 副主査 若林 幸子

令和6年2月から同年5月に行った発掘調査では、江戸時代初頭から末葉にかけての遺構・遺物を多数検出しました。それらを通じて大坂城下町がどのように形成され、発展したのか、また江戸時代の人々が実際にどのような食器や道具に囲まれて暮らしたのか、その一端を知ることができました。それらを発掘調査の際に撮影した写真などを元にわかりやすくご紹介します。